

『大日経』『住心品』に説かれる「世間心」について

研究生 伊藤 真弘

『大日経』『住心品』において、「世間の八心」と「六十心」は世間心の段階に当てはまると考えられる。更には、「百六十心」は、名称が散見され程度ではあるが、これまでの研究から、無視出来るものではないので、これも含めて「世間心」について取り挙げ、心品転昇との関わりを探っていく。そして、今回はBuddhaguhya著『大日経広釈』の解釈を参考にまとめた。

「住心品」における世間の者とは、愚童凡夫とされ家畜に等しい。彼らは我にとらわれ、我所にとらわれ、我を分別してしまう者と説かれている。おそらく、世間の者でも、最も低い位置付けにあたるものと思われる。「世間の八心」のうちの第一心は、家畜のように食欲等の欲におぼれ悪行にはげむ者が、斎戒に住し、それをすばらしいと思い修習する。第二心以降は、施物を与えることがより大きい功德となるように、各段階に於いて相手に施物を与え、第七心は、天に生じる為に戒を守ること、最後に第八心は、自在・梵天を初めとする諸天を敬い、よく供養するに努め、輪廻に流転する愚童凡夫の蘇息の最勝なる段階に達する。しかし、第八心の世間者達は、空性にすぎないものを、存在すると言って、空性を理解していない者であると説かれ

ている。このように、第一心から第二、と順々に世間の者が最も低い位置から転昇していく事が現されている。

Buddhaguhyaの見解では、「世間の八心」は、毘盧遮那の因と言うことが出来ると考えられる。また、世間の者にも二種あって、「悪言・悪行をする愚童で、我・我所に執着している者」と、「我・我所を分別したものに依止し、施等をなして解脱を願う者」とされる。更に、第八心の、自在天・梵天等の諸天は、毘盧遮那の身より化作した智薩埵であって、輪廻に流転する凡夫達に対して、それぞれの涅槃の道を示す者であって、その道を示すことは、毘盧遮那が証得する因と相応すると述べられている。よって、「住心品」の心品転昇の世間心に相当する段階に、世間の八心が組み込まれることが推測できるものと考ええる。

「六十心」について、Buddhaguhyaは、真言門の行により、心の差別たる六十心を超える者には、有三昧耶の利根・鈍根の者がおり、まず、鈍根の者とは、世間者の道たる空性に唯一性の慧を生じたこと、としている。利根の者は、初めから人法二無我を証していると述べられている。よって、「世間の八心」に住す世間者が、越えるべき心として、「六十心」が説かれていると考えられる。しかし、Buddhaguhyaが六十心を解釈している中で信解行地まで考慮していることを考えると、この六十心は世間者だけではなく出世間心に住する者にも当てはまる可能性がある。

また、六十心から百六十心へ増大することは、三つの微

細な障礙を、それぞれ三つに分類し、大ノ大障礙から小ノ小障礙の九種と見るべき事と同じであるとされる。そして、第八の小ノ中障礙を捨てることは、信解行地を円満するのと等しいとされる。更に、第九の小ノ小障礙は、信解行地から転昇して捨て去って智地に入るのだと解釈されている。この、小ノ小障礙は、信解行地より転昇して智地に入るまでに用する四分の一劫に当てはまるものと推測出来る。つまり、「百六十心」とは、「世間の八心」に住す者から信解行地の者にまで及ぶと考えられるのは間違いないだろう。